日々新聞

第拾三号

泉州佐野市場村なる辻本屋といふ宿屋へ堺縣下の小商人松兵衛八明治八年三月中旬一泊せしに下女なるお梅の容姿なるふえや煩脳の一念たつ〜官女の面影ありしや昨年の紐のとけ安さうやでふ甲掛のそこいろ朱丸の一枚まておきて汚れる袖の縁間せまう紀宿は夫人の泊まるれば梅の箸を松兵衛のいつくまへさ〜是をあるべき忍ぶうちんちのひしーるを合宿の長兵衛洩れうえやそれくの旅枕道の労をふ松兵衛もうく熟睡の折をうかゝ長兵衛八計りふしその箸を我づからさ〜かへ待間うそ〜お梅の足音

聞ふてくちぶく語ひ八声のうち松兵衛目覚し宵の約束のうんざしゆくお梅を敲ぎたづねふ初てこの的ちぶひ矢竹ふあつてお梅八罵り呆れ大声のいさひとり一夜流の水掛論実ふ珍説笑ふ絶えて

吉原法

信敬之代
美人伝亜
仙蓬亭
春
彫福刀

日々新聞13号　文庫10-8070-9
早稲田大学図書館蔵／Waseda University Library